

南方熊楠と岩田村

○ はじめに

南方 熊楠(みなかた くまぐす)は在野(ざいや)の研究者である。慶応三年(1867)四月、和歌山城下に生れ、和歌山中学校を卒業後上京、大学予備門(現東京大学)に入学したが二年次に中退、その後アメリカ、イギリスと十四年間にわたり遊学、関心のおもむくままに野外に植物の採集をしたり図書館に入って書物を漁(あさ)り、自然科学、人文科学の諸分野に幅広く研究を深めた。

明治三十三年(1900)に帰国、一年を故郷で過ごしたのち、弟の酒造会社の支店のある東牟婁郡勝浦村(現那智勝浦町)へ入った。山も海も、人情も風俗も、ことさらに近代化の波を受けていない、日本の原郷(げんきょう)ともいうべき「熊野」に学問研究の豊富な材料を得たいと思ったからである。勝浦からは原生林のある那智山はほど近い。二年あまりを那智山周辺の隠花(いんか)植物の調査に費したのち、研究の場を田辺に移した。明治三十七年十月のことである。

○ 神社合祀の嵐の中で

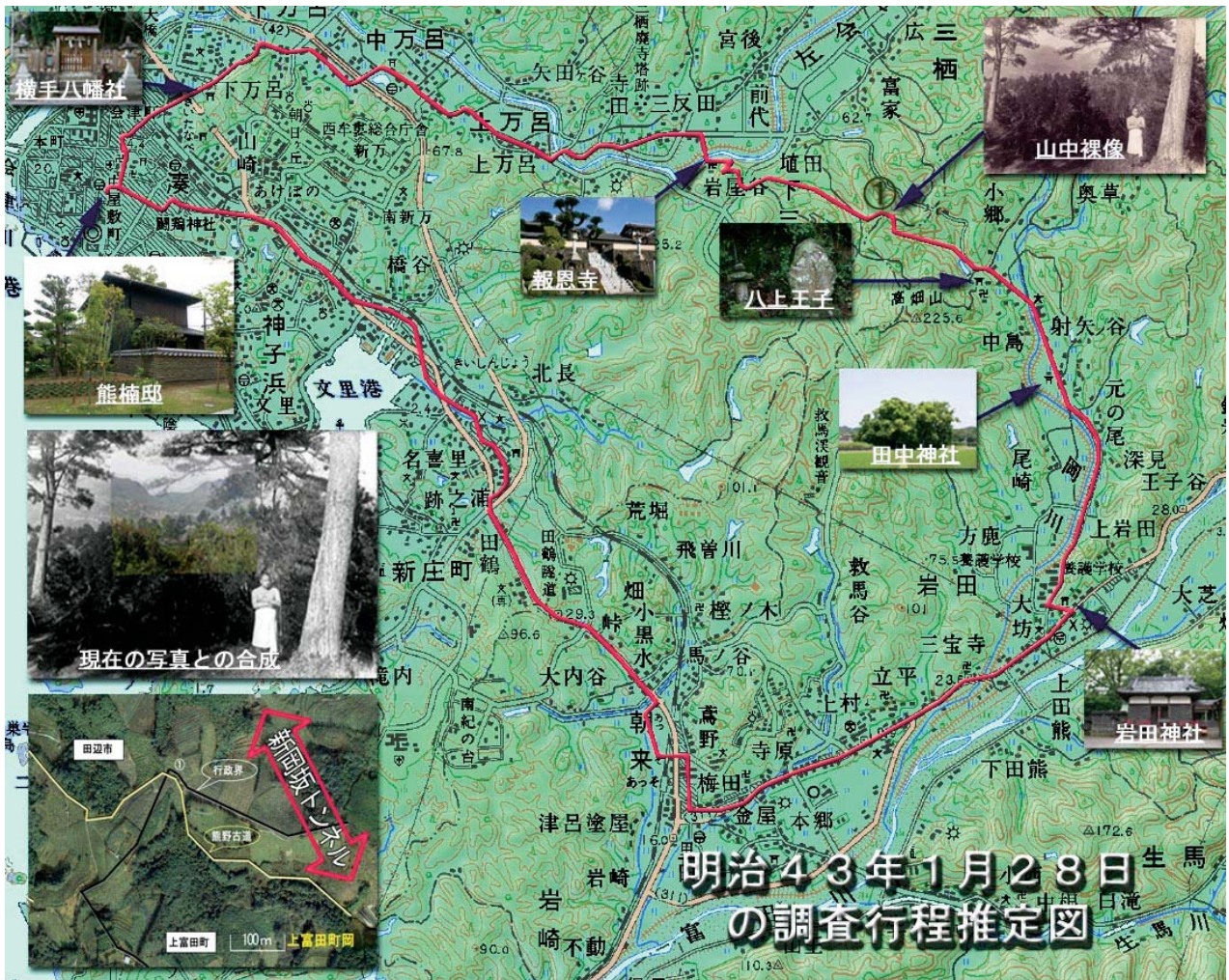
明治三十九年十二月十八日、西牟婁郡役所は各町村宛に神社の一町村一社を標準とする存置と、無格社の村社合併について来年四月まで終わるようにという通達を出した。村社以外で今まで通り置いてもよいのは、特別に由緒のある神社か、維持管理がりっぱに出来るという保証(積立金)があることとなっていた。これは明治政府の訓令を県知事が郡役所へ指示したもので、村長の中には不必要に強引な合祀(ごうし)を行うものが出た。上富田町内では明治二十二年に岩田村、岡村が合併して岩田村に、朝来村、岩崎村が合併して朝来村になるなどの結果、合祀の対象となる神社が多かった。中でも熊楠がその環境と共に保存させたいと強く願ったのは、中辺路(なかへち)参詣道に残る八上王子社、稲葉根王子社であり、民族学上も貴重な遺跡としてヌカ塚(朝来)と田中社(岡)があった。神体はともかく、合祀後もその森だけは何としても後世に残したい。

そこで神社合祀によって起る弊害を実地に調査し、その惨状を写真に収めて国会の場へ持ち出そうと熊楠は行動を開始した。熊楠の合祀反対の第一声は田辺で出た「牟婁(むろ)新報」の明治四十二年九月二十七日付けに掲載され、その後は東京朝日新聞、大阪毎日新聞、雑誌「日本及日本人」などへ矢つぎばやに投稿、世論を喚起するのに努めた。次の日記はその材料の収集に上富田を訪れた前後のものである。



明治四十三年(1910)

- 一月二十三日 本日の大阪毎日新聞にカノヘゴの記及び予の神社合併運動に関する説話出づ。
- 一月二十四日 夕、辻一太郎招き来る。写真機とりに帰り後來る。共に神子浜(みこのはま)にゆく。六本鳥居の社撮影。
- 一月二十五日 辻氏と岡へゆく約束のところ雨につき見合わす。
- 一月二十六日 午前十時頃起く。辻一太郎氏に同行をすすめに下女遣わす。風邪にて行けず。
- 一月二十七日 昨日より和歌山新報も予の神社合祀反対意見連載。
- 一月二十八日 朝八時頃起。辻氏感冒平治の由ゆえ、午下(ひるすぎ)家を出、同氏を訪い共に横手八幡(写真とる)より三栖千法寺、それより岡に出、途中松グミ生たる松の下に予裸にて立ち喫煙するまま写真。岡の八上王子及中宮写真、それより岩田大坊、松本神社写真(岩田神社)、黄昏(たそがれ)なり。朝来入口にて丸(まる)で淡昏(うすぐら)くなる。それより新庄を経帰る。予脚絆はくを忘れ脚はなはだ痛む。



○ 八上王子

しかして右の八上(やがみ)王子は『山家(さんが)集』に、西行、熊野へ参りけるに、八上の王子の花面白かりければ社に書きつけける

待ち来つる 八上の桜 咲きにけり 荒くおろすな 三栖の山風

とて、名高き社なり。シイノキ密生して昼もなお闇く、小生、平田大臣に見せんとて写真とりに行きしに光線入らず、止むを得ず社殿の後よりその一部を写せしほどのことなり。この辺に柳田国男氏が本邦風景の特風といえる田中神社あり。勝景絶佳なり。

また岩田王子、すなわち重盛が父の不道をかなしみ死を祈りし名社あり。

(「松村任三宛書簡」。明治四十四年八月二十九日)

○ 田中神社

今回田中神社を八上神社に合祀したについて、その跡森を伐採して八上の神田とすると聞き及ぶ。この田中神社と八上神社と岡川八幡神社の写真は、かつて「日本及日本人」にも載せ、また前代議士中村啓次郎君より時の内務大臣平田男に示して讃称を得たこともあり、かかる古社はなるべく保留を望むとの言なりし。田中神社の風景美観と紫藤(ふじ)の優雅なること、ならびに現時植物学上の大問題たる松葉蘭発生研究に最高の場所たること、またことに予が先年来潜思考(せんしこうさく)中なる、わが邦(くに)の古社にはオリエンテーション(方位)を正しく立てたる事証(あかし)ある論も、この田中神社を手掛りとして着手し得たところで、昨年四月東京発行「郷土研究」102～4頁にその緒言(しょげん)を出してより、大いに識者の注意を惹(ひ)きおる。

(「岩田村大字岡の田中神社について」大正五年一月十五日「牟婁新報」)

○ 上富田の民俗書留め

大正二年五月二十八日夜、稗田浅吉にきく。その郷里、岩田村大字岩田にては、蜚、昼間は鼓虫(こちゅう・マイムシ)たり。夜に及んで蜚となるといふと。

またいわく、カシャンボ(河童)、夏、牛(うし)の日より川に入り、冬、玄猪(いのこ)の日より山に入る。木を伐(き)る音のまねし、また異様の声より人をよぶと。

また、ミミヅク、一斗(いっと)二斗三斗となく。ゆえに麦量(むぎはかり)と名づくと。

同年六月四日夜、検番の直公にきく。朝来の彦五郎堤はしきの幅二十五間(注:約五〇メートル)、上の幅も十間もありつらめ。上にて祭りの馬駟(か)けしたり。よほど大なる堤なり。(明治)二十二年の水害に崩れたるを近年直せり。この堤の由来、彦五郎というもの、人柱の人選の法を言い出し、己(おの)れそれにあたりしこと長柄(ながら)の人柱に同じ。右の水害にて崩れし後捜せしも人柱の跡らしきものなかりしと。宇井縫蔵氏同日来状に、岩田村大字立(たち)より生馬(いくま)村の境界に当れる辺を彦五郎堤という。

六月六日夜きく。稗和の若いわく、彦五郎、袂(たもと)に横にしま入りあり、人柱に入れらると。

六月七日、宇井縫蔵氏よりの通信。岩田の彦五郎堤は、たびたびの出水にて破潰(はかい)し、生馬、朝来辺の被害しきりなりしゆえ、奉行(ぶぎょう)来り地方の人を集め協議し、人柱を入れんとのことなりしも、進んでこれに当らんとする者なし。来る人のうちにて着物に横つぎあるものを人柱とすることとし、検査せしに彦と五郎二人これありしゆえ人柱となる。この堤、二十二年の洪水(こうずい)にてことごとく潰(つぶ)れおわる。この辺、夜更(ふ)けて通るに往々変死するものあり。同地方はもちろん、田辺地方にても男子の着物に

横つぎを忌(い)む。

○ 熊楠を支えた人びと

熊楠は門弟というのを持とうとしなかったが、その研究姿勢に惹(ひ)かれて志願して協力を申出る人があれば、それを拒むこともなかった。粘菌では小畔(こあぜ)四郎、上松翫(しげる)、平沼大三郎の三人がそれで、キノコでは北島脩(しゅう)一郎、檜山嘉一、平田寿男、田上茂八の四人がいる。

熊楠は、前記三人を「三羽烏(がらす)」、後の四人を「四天王(してんのう)」と呼んで、共同の研究者として遇している。この四天王のうち田上が新庄村の人で、あとの三人は岡の出身者だった。また岩田出身で親交があったのは宇井縫蔵で、宇井は南方の質問を牧野富太郎に斡旋するなど植物、魚類の方面での協力者だった。このほか、町内の民話、民俗について話題を提供した人びとも先きにみたように多かった。

町内の植物

○ 八上神社の貴重な植物

小生知るところ、八上の神林の植物を古く気づきしは栗山昇平氏にて、当時その草木の名を知んにも手がかかりなく、幾年かたつうち田中芳男男(だん)当地へ来り中屋敷町の五明楼に宿りしことあり。(明治二十六、七年より前のこと)。昇平氏推参(すいさん)してことごとく標品を示し一々名を書きつけたるなり。一昨年頃広島県で死なれ、今はその人の名さえ記憶する人なきも、その功は没すべきに非ず。またそれより前に県庁の学務課長たりし美山巖氏あり。一昨年大阪で死せし栗山寛一氏の実兄なり。また県庁の勸業課長たりし南部町生れ牛尾興業氏あり。これらの人々も岩田や岡の植物を少数乍(なが)ら調べて書き上げられしなり。鳥山啓(ひらく)先生に至っては、田辺生れだけに幼少より三栖、岩田から栗栖川、近野辺を毎度跋涉(ぼっしょう)し、写生図も多く、標本も多く、ことに田中男と永年親交ありしゆえ、いろいろと知り明(あか)らめられたり。その前には小原(桃洞)、畔田(くろだ)(翠山)諸先生自らこの辺に來り、書き残されたものいろいろあり。小生も写して持ちおり。これらの先生が紀州に出て、紀州の物を書き上げられしは、紀州人の幸いなり。

(檜山嘉一宛、昭和九年三月二十六日付)

ヤツシロランの絶滅は小生常に憂うところにこれあり。おいおい交通が便利となるに随い、ますますこの憂いが大きくなりもうすべく候。これを防ぐの法は、貴下や檜山氏などがあまりこんなものがこの村の何大字何字の何の地にあるといいちらさぬことにござ候。かようのものを見出したら、岩田村で見出したら、岩田村で見出せりというだけにてよろしく、その上のことはかならずいわぬことに候。それをヤツシロランは岡の八上王子にありとか、また、何れのところにありとかいいうは、盗人を募集するようなものにて、そんなことでは決して保存は出来るものにこれなく候。

(平田寿男宛、昭和五年五月七日)

○ オカフジの命名

この田中神社には珍しいオカフジが繁茂している。県指定の天然記念物であるが、この命名の由来が当地の植物研究家檜山嘉一宛の熊楠の書簡に述べられている。

昭和六年十月十八日午前六時四十分

檜山嘉一様

南方熊楠

拜啓 過日御将来(しょうらい)の紫藤(ふじ)は、小生自ら色々取調べたところ、間違いもなくキフジ、オ

カフジと本草図譜(ほんぞうずふ)巻二十九に出おるものに候。ちょうど大字(おおあざ)岡に産するゆえ、オカフジという名がよろしきように思うも、牧野博士(注・牧野富太郎、植物研究家)は、これにヤマフジと名を付けあり。小生はすでに古くよりキフジ、またオカフジなる名称があるに、昨今ヤマフジと命名するはいかがと存じ候。(こればかりが、どこの山にも生ずるにあらず。よそは知らず、紀州には山に生ずるフジは多くは例の穂が長きものなればなり)。このこと一度牧野博士へ問合わすべきも、とにかく小生はオカフジという古い名がよいと存じ候。

学名 *Kraunhia brachybotrys* 尋常の穂の長いのは *Kraunhia floribunda* に候。

(中略)右のオカフジは今のように品が少なくは、しゃべりちらすとすぐ取り尽されるから、当分黙しおり、貴地方へその種子を播殖(はしよく)させられたく候。

上記の手紙から推測出来るのは、昭和六年の夏、田中神社の森に咲いたフジが、平生よく見かけるものより花が短いことに気づいた樫山氏が、何というフジなのかと実物を折りとって熊楠宅へ持ち込んだ。熊楠が調べたところ『本草図譜』— 岩崎常正(灌園)著・文政年中手稿本 — に、キフジ、オカフジとしているのと同じものである。ところが牧野氏の図鑑ではこれにヤマフジと新しい名をつけている。古い書物にすでに名前があるのに新しく名前をつけるのはどうかと思う。とにかく、私は古い名のオカフジを推したい。ちょうど自生地も「岡」であるからオカフジが似つかわしい。ということで、南方先生命名の「オカフジ」が誕生したのである。

このほか岩田出身の宇井縫蔵にも同じ時期に次のような手紙を出している。

昭和六年十月二十九日

宇井縫蔵様

南方熊楠

貴下の紀州植物編に、フジの一種に本草図譜にキフジまたオカフジと名づけて図せるもの出でならず。樫山氏前年岩田村岡の田中神社跡地に数本あるを見出し持来り候につき、注意して花から幼葉、芽から熟せる子実までたびたび持来りもらい調べしに、牧野、田中二氏によれば『日本植物志』ヤマフジとせるものに当り候。花の穂が常の藤よりはなはだ短く、花大きく当地方にてフジマメの一種、板と名づくるものに似おり、美なるものなり。小生は日高郡の藤滝その他紀南諸山中にてフジを多く見たるも、この種はこれが初見にござ候。貴下はかつて見られたることありや。しかしてこの物すでに古くキフジ、またオカフジと名づけられ、発表されあるに、牧野氏は別にヤマフジの名をつけあり。山フジとは人を謬(あや)まりやすき詞(ことば)にて、山中にあるフジは過半(かはん)この穂短かく花大なるものなりという誤想を生ぜしむことと存じ候。(後略)

○ 八幡社の森

岡川の八幡神林のごときは本邦(ほんぼう)稀有(けう)の天然林である。

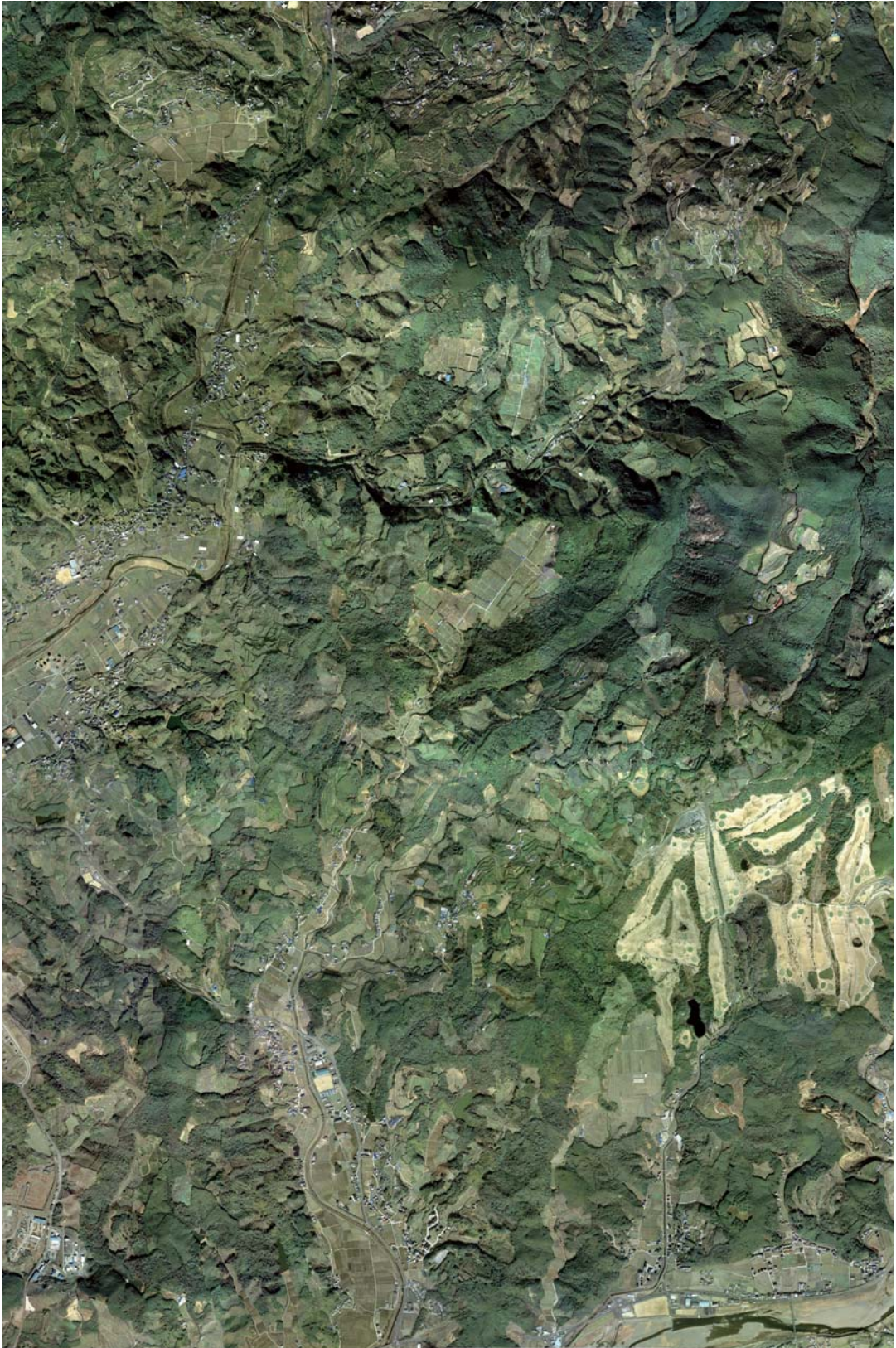
(談話「牟婁新報」大正五年一月十日付)

岡川八幡宮の神林は従来(じゅうらい)奇草異木(きそういぼく)多く、神体は形式的に合祀されたるも、字民(あざみん)今も小生の訓(おし)え通りに神林を伐らず祭祀を行い、旧日同様に保存頑守(がんしゅ)す。この神林には朽木甚だ多く、ちょっと僻遠(へきえん)ゆえ、小生は未だ往(ゆ)きしことなきも奇菌(ききん)今も続々発見さる。

(小畔四郎宛書簡、昭和四年十月七日)



岩田地区



岡地区

土地利用現況図

